

## 「卒サラ后 命じる役は 老妻に」

西川武彦

表題は、酔雅こと筆者が卒サラ川柳の兼題「命じる」で詠んだ、やるせない思いがこもった一句です。

コロナ禍で狭い書斎に閉じ込められたご隠居に、「御飯が出来たわよ、冷めるから早く…」と、ダイニングルームから声が届きます。ドアを開けてある書斎で朝からパソコンに没頭するご隠居は、犬を真似て「ワン」と応じ、ご命令に従って、リビングルームに移り、ランチ。

うどん、そば、はたまた残り物を炒めたチャーハン……。限られたメニューが頭を巡ります。今日の正解は、「うどん」でした。油揚げが三枚浮いています。添えられた野菜の煮物は昨夜の余りものを炒めたものという印象です。

箸を運びながら、テレビでニュースを追って、つるつると吸ります。平日ならチャンネルは5番、テレ朝の大下容子さんのワイドスクランブルに決まっています。なぜか相性がよいらしく、彼女を観ながら食べると消化が良いようで、昼時の楽しみになっています。

昼食でお腹が膨れると、眠気が襲います。リビングルームの皮のソファはベッド替わりにもなるサイズがあるので、心地よい。読み残しておいた新聞を仰向けになって広げ、記事を追うこと十分足らずで、新聞紙を顔に覆ったまま爆睡です。

三十分余り昼寝すると自然に目が覚めるようです。夜には8時間は床にいるのですから、それ以上眠るのはダメと、身体が知っているようです。これから暫くは午後の読書です。仰向けになってページを繰っても苦にならない新書本です。

これからの始末を考えれば、図書館から借りだして読むのが合理的でしょうが、歩いて行ける範囲にはありません。で、散歩先にある笹塚の紀伊国屋やシモキタの三省堂の支店で漁ります。それらのレジカウンターで働く女性との短いやりとりが憩いの一つでもあるのです。切り抜いた新聞の書評欄を差し出して、「これはどの辺にありますか？」と問いかければ、頼りなさそうな老人を見て、「ご案内しますからどうぞ…」となります。

帰りがけに老妻から頼まれたものをスーパーで調達せねばと思い出すが、それがなんだったかわすれている始末。……という状況のなか、酔雅が詠んだ別の句は、「命じても 耳が遠くて 空回り」。お粗末さまでした！